

國語讀本

高等學校用

卷三

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	款	國語
目		次
全	冊ノ内第	冊
分類 番號	第	號

372.82
24584

T1A3
10
Ts21

47703

日三十月二十年三十三治明
書科教用童兒科語國校學小等高
濟定檢省部文

文學博士坪内雄藏著

國語讀本

高等小
學校用

卷三

東京

合資
會社

富山房藏版

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 8 1 2 a

福岡教育大学蔵書

卷三 目次

第一課 太陽……………一
 第二課 都の花見(女の春遊)……………二
 第三課 熊野……………五
 第四課 迂闊なる醫學生……………七
 第五課 胃の腑の説諭……………九
 第六課 食物……………十一
 第七課 動物の自衛……………十三
 第八課 大塔宮吉野落……………十六
 第九課 蜜蜂……………十九
 第十課 一家の經濟……………二十一
 第十一課 孟子の母……………二十三

第十二課 瀑布……………二十五
 第十三課 富士登山(上)……………二十七
 第十四課 同 (下)……………二十九
 第十五課 短為一東 才と拙
虎と女
世は相持……………三十二
 第十六課 分業……………三十三
 第十七課 望遠鏡の發明……………三十五
 第十八課 星ノ話……………三十六
 第十九課 少年駱駝御者……………三十九
 第二十課 埃及のピラミッド……………四十四
 第二十一課 物價の事……………四十六
 第二十二課 貨幣及び為替……………四十八

注意
 米、穀、
 外、出、
 新、漢、字、
 若、シ、ク、
 ハ、熟、語、
 以、外、ニ、
 註、明、ス、
 ア、ル、ハ、
 合、二、開、
 シ、テ、之、
 語、之、
 フ、二、同、
 恩、澤、
 被、

國語讀本 卷三

高等小
 學校用

第一課 太陽

太陽は、光と熱とを、地球に與ふる本源
 なり。地上の生物、一として、其の恩澤を
 被らざるものなし。

太陽は、絶間なく燃えて、光と熱とを發
 散す、甚だ大いなる球體なれども、地球
 よりの距離遠ければ、肉眼には、小さく見

直径

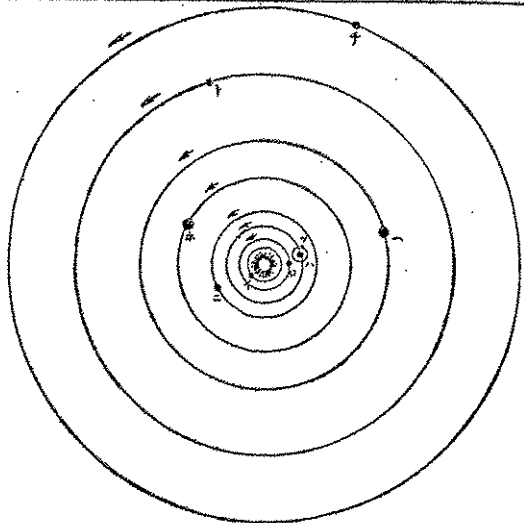
ゆるなり。太陽の直径は、凡そ三十五萬里と稱す。地球の直径は、三千二百餘里なれば、太陽の直径は、地球の直径の百倍餘にあたり。

太陽は、かゝる大いなる火の球なれば、若し、地球などが、傍へ寄らば、すぐにも焼き盡さるべき程なれど、幸にして、地球と太陽とは、よき程に離れたれば、熱も光もおのづから、よき程にあたるなり。

星

水星 金星 地球 火星 木星 土星 天王星 海王星 月

關係



地球は、太陽の周圍を回轉する小さき星

の一たるに過ぎず。水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星など、皆、同類の星なり。此等の星と太陽との關係は、略

圖に示せるが如し。

春夏秋冬の季候の變化は、太陽と地球との關係に基く。熱帶、寒帶などいふ地理上の區別も、亦た然り。草木のめぐみ、花咲き、實を結ぶも、亦た、太陽の餘澤なり。

第二課 都の花見の景況を知らする文

最中

＊ 様

＊ 賑

＊ 祭禮

＊

春も、やうく最中と相成り候。祖母様御はじめ、皆々様、御機嫌よくおらせられ候や。春の樂しさは、都田舎の隔てもなく候へど、取りおけて、都の花時に、上野向島邊の賑ひは、田舎の祭禮を、幾つものしよにいたし候様候。人力車、自轉車、騎馬など、目まぐるしき中を、鐵道馬車、おふるゝほど、人を載せて、絶えずゆき、熱し候。上

開設

野の公園には、平生開設の博物館、動物園、パノラマなどの外に、花時は常例の様、に、美術品、工藝品の展覧會等開かれ、向島界隈には、護謄張の掛茶屋、いくらもしく出来申候。花見の趣向、いろいろに候うち、樂隊を先きに立て、紅白の運動帽を冠り、進行の歌をうたひて、立出で候は、學校生徒にて、小中學とも、大がい同じ様に

趣向

候思ひつきのをかしきは、落語家連中、揃ひの扮装は、藝人會社員など、酒煙草化粧品類の廣告する人の扮装は、取りわけてをかしく候。向島の堤は、花の間は、車馬止にて、往來は、すこしもとぎれず、屋形船にて、隅田川を上る人々もあれば、ボートレースもあり。これは、第たちに見せたく候。青白赤など色わけしたる短艇が、一

舵

想像

海苔

齊に、舵を擧げ、波を蹴たて、漕ぎ競ふ様、まことに、勇ましく候。都の花見の賑ひは、とても、私の筆にては、寫し盡されず候ま、花時の寫真數葉さしあげ候。御想像遊ばされたく候。味附海苔、一罐、おめづらしくはなけれど、祖母様おすきゆゑ、相添へ申候かして。

東京にて

やへ

*

看病

*

第三課 熊野

むかし、平家盛んなりし頃、大將宗盛（宗盛）の召使に、熊野といふ心だてやさしき女ありけり。或年の春、國もとの母、重病の由言ひおこしければ、看病の爲め、身の暇賜はりたし、と願ひけれど、花見の折に、用あればとて、許されざりき。其のうちに、使又來りて、母の命、今にも危し、と傳言す。

*

熊野は、心も狂ふばかり、氣をもみけり。折しも、宗盛召しければ、参りけるに、けふは、天氣よければ、花見にゆくべし。準備して、供せよ。と言ふ。かしこまりぬ。と答へけれども、つらさに、打ち萎れぬたり。宗盛、其の顔色の、常とちがふを見て、如何にしたるぞ。と問ふ。熊野、恐るく、母の病重りて、命危ければ、先頃も願ひし通り、何卒、御暇賜はりたし。といふ。宗盛は、

何卒

*

採 陰

*

きゝもはてず、けふの花見すまば、隨意にせよ。只一日待てぬこともあらじ、ともかくも供せよ。といひて、車にて出かけぬ。據なく、車につきて、出でけるが、熊野は、途々思ふ様、花は、春くれば、又咲くものゆゑ、散ればとて、惜しからぬど、二つなきものは、人の命なり。命の絲は、一たびちぎるれば、二たびとは、つなぎ難し。なさけなや、此の世にては、もはや、母様に逢はれ

境内

ぬか。と人知らぬ涙にむせびけり。
 さるほどに、宗盛の車は、清水寺に着き
 ぬ。 廣やかなる境内も、うづまるばかり
 に咲き亂れたるしだれ櫻、一重櫻など、美
 しく、今を盛りの風情、譬へんに物なし。
 宗盛は、盃をとりて、此のけしきをながめ、
 腰元に、舞ひ歌はせて、樂しみけるが、はて
 は、熊野にも、舞へ、といひつく。 熊野は、か
 なしさに、舞ひ歌ふ氣勢はなけれど、主人

是非

のいひつけゆゑ、是非なく、
 いかにせん、都の春も 惜しけれど、
 なれしあづまの 花や散るらん。
 と、母の病氣の、且夕にせまれる由をほの
 めかしつゝ、舞ひければ、聴くもの、皆、あは
 れがりて、泣きけり。

即座

思ひやり薄き宗盛も、不便と感じてや、
 即座に、暇を與へければ、熊野は、取るもの
 も取りあへず、その場より、旅立ちして、あ

づまの母のもとへ歸りけり。

第四課 迂濶なる醫學生

むかし、京都の一少年、醫學を修めんとて、長崎に赴き、或和蘭人に就きて、學びけるが、思ふ様、凡そ、學理は、必しも、常に記憶する要はなし、寫しとゞめ置き、て、用ある時々に、取り調ふれば可なりと。かう思ひければ、日々の講義はいふに及ばず、凡

記憶

講義

そ、醫學の書類は、目にふるゝに任せ、ひたすら、寫し取ることをのみ務めけり。

五年程たつうちに、寫本、數百卷に及びけり。少年思ふ様、もはや、寫すべき珍書もなし。我が學は成就したり。いざ、京に歸りて、此の書類を取り調べながら、開業せん。と。やがて、師に、別れを告げ、夥しき寫本をば、行李に收めて、長崎の港より、船に乗り込みけり。

かくて、日數經て、その船、玄海灘を過ぐる頃、空模様、俄かに變りて、風荒れ、浪高くなりぬ。船は、木の葉の様に漂ひ、乗客は、生きてゐる心地もなし。さる程に、大浪逆巻きて、船をおほふと見るうちに、艦に積める大小の荷物、皆一度に押し流され、醫學生の行李も、共に、行方しれずなりけり。程經て浪風をさまり、船は、馬關に着きけるが、寫本一部も、残らざりしかば、五年

* 醫 *
の苦學、あだとなりて、醫學生が智識は、都を出でし時に異ならざりき。書籍のみをたよりにせば、かくの如き悔あるべし。

第五課 胃の腑の説諭

* 腑 *
ある時、目、鼻、口、手、足などが、胃の腑に對して、不平をいだき、相談會を開いた。先づ、口がいふには、胃の腑が、毎日、食物を得るのは、悉く、我れくの力である。

然るに、彼れめは、為ながら、それを食ふばかりで、只の一言も、禮をいはぬ。失敬な自分勝手ではあるまいか。以後は、皆が働くことをやめて、あのなまけ者を懲らさうではないか。といふと、一同、聲を揃へて、賛成くと叫んだ。

そこで、足は、膳に近よることをやめ、手は、箸を取ることをやめ、鼻は、物を嗅ぐことを、目は、物を視ることをやめた。耳も

齒も、舌も、皆、めいくと、なまけはじめた。

かくて、二三日たつと、手足はなえ、目は凹み、肉は落ち、息は切れ、つまり、自分たちが苦み始めたゆゑ、一同、大いに驚き、これはまた、とんだことになった、と後悔し、又もや、相談會を開いてゐると、そこへ、胃の腑が來て、一同に向ひ、下の如く説得した。

一體、諸君が、僕を、自分勝手のなまけ者と見たのが、誤りの始めである。諸君が

消化

送られた食物は、からだ全體の爲めにな
るので、僕は、只、それを消化し、滋養分にし
て、諸方の血管に送る役廻りをしたばかり。
諸君の中に、其の養ひを受けな
り。ものは、ない、受けたればこそ、健かに働く
ことが出来たのである。然るに、さうと
は思はず、一圖に、僕をそねみ、職分を怠った
のが、此の苦の原因。そこに、氣がついた
なら、今より、心を改め、めい／＼、職分を大

原因

健

協力

懇

事になさい。何事も、協力同心が肝要と。
やさしく、懇に説得した。
手も、足も、目も、口も、其の他、一同、成程と
感服し、それからは、忠實に、めい／＼の職
務を力めて、協力同心したといふ。

第六課 食物

供給

飲食ノ目的ハ、身體ニ、滋養物ヲ供給シ
テ、體力、心力ヲ強壯ニスルニ在リ。身體

適宜	活潑	脂肪 澱粉 蛋白質 含
<p>ヲ組織セル物質ハ、身心ノ働クニツレテ、次第ニ消費セラル、道理ナレバ、適宜ニ飲食シテ、コレヲ補フコト必要ナリ。然ラザレバ、體モ、心モ、活潑ナル働キヲツヅクル能ハズ。</p> <p>滋養物トハ、主トシテ、脂肪、澱粉、蛋白質、ナドイフ物質ヲ含メルコト多キ食品ヲイフ。イヅレモ、皆、人體ニ必要ナル物質ナリ。但シ、カタヨリテ、其ノ一二種ヲノ</p>		

歌
<p>ミ食スルハ宜シカラズ。</p> <p>肉類ハ、概ネ、脂肪ト蛋白質トニ富ム。卵、乳汁ノ類、マタ然リ。肉類ハ、獸肉、鳥肉、魚肉等ヲ主トス。サレド、肉類ニハ、澱粉質乏シ、故ニ、肉ト共ニ、植物性ノ食品ヲ食フ必要アリ。</p> <p>植物性ノ食品トハ、穀類、菜類、果實類ヲイフ、皆、澱粉質ニ富メリ。五穀、最モ滋養ニ適ス。就中、豆類ハ、多量ノ蛋白質ヲモ</p>

冷 *

液 * 素

含ミ、米類ハ、多量ノ脂肪質ヲモ含ム。
 身體ヲ養フニ、缺クベカラザル物質ハ、
 以上ノ三物質ノ外ニ、尚ホアリ。骨ヲ造
 ルベキ燐^{リン}、酸^酸、石灰^{石灰}ノ如キ、是レナリ。菜類、
 肉類ナドハ、コレ等ノ物質ヲ含有ス。
 右ノ諸物質ニモ劣ラズ大切ナルハ、食
 鹽ナリ。食鹽ハ、食物ニ、ヨキ味ヲ生ゼシ
 ムルノミナラズ、血液ノ成分トモナリ、胃
 液ノ素トモナル。

睡 忌 睡 眠 睡 眠

多ク、滋養物ヲ食フトモ、胃ノ力弱クシ
 テ、消化スル能ハザレバ、効ナシ。故ニ、胃
 ヲ強クスルヲ第一ノ心掛トナスベシ。
 胃ヲ強クスル法ハ、第一ニ、食事ノ時刻及
 ビ回数ヲ一定スル事、第二ニ、食物ノ種類
 ヲ擇ブ事、變化配合スル事、第三ニ、食物ノ
 分量ヲホドクニスル事、第四ニハ、程ヨ
 ク運動シ、休息シ、睡眠スル事ナリ。甚シ
 ク熱キモノ、又ハ、冷キモノヲ食フベカラ

非 諺 源 候 病 源

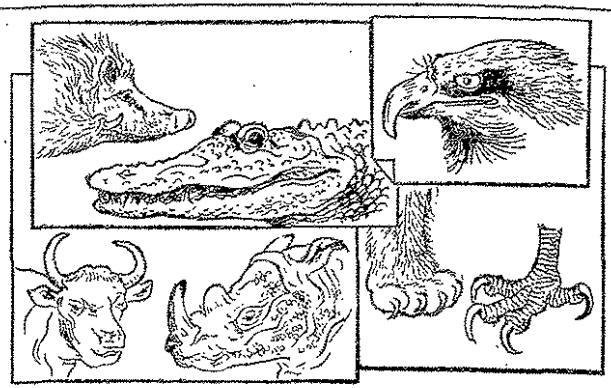
ズ。ヨク嚼マズシテ食フ、マタ、非ナリ。
 諺ニモ、命ハ食ニアリ。トイヘリ。宜シ
 キヲ得ザル飲食ハ、百病ノ源トナル。慎
 マザルベカラズ。

第七課 動物の自衛

鴞 牙 押

犬に牙あり、牛に角あり。鴞には、嘴と
 爪とあり。獅子、虎の如き猛獸に至りて
 は、更に鋭き爪、牙を具へて、身を護り、敵を

鷹 鷲 兎 魚



斃す。牙、角、嘴、爪等は、
 禽獸の武器なり。
 動物の中には、武器
 を有せざるも、少から
 ねど、相當の自衛法を
 具へざるはなし。さ
 ざえ、蛤の如きは、行歩
 も自在ならねど、貝殻
 に潜むときは、猛き魚

例 鏡 襲

すらも襲ふ能はず。蝦蟹、龜、甲蟲の類はた然り。これらは鎧を被りて敵を防ぐ。尚ほ面白き自衛法あり。例へば松に鳴く蟬のその色、松の皮に似たるひきがへるの土色をなせるなど、是れなり。敵來りて捕へんとするも、周圍の色にまぎらはしき故に、とらるゝこと少なし。

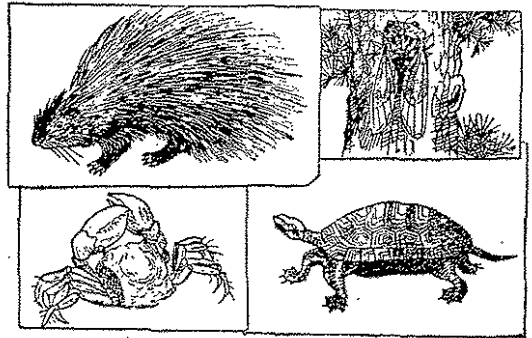
北國に住む野兔は、毛の色、夏は土の如く、又は樹の枝の如く茶色なれど、冬は雪

窮 濁

の様に白くなるとぞ。これまた前と同様の自衛法なり。

鳥賊は敵にあへば、墨汁を吐き、周圍の水を濁らせて、身を匿す。魴は窮すれば、惡臭を放ちて、敵を防ぐ。雁

鴨などは、群居して生活し、眠る間には、見



哨兵 張番をおくこと、軍隊が哨兵を置くが如

し。

最高等動物たる人類は、腕力も甚だ強
からず、角もなく、鋭き牙もなし。また、甲
殻なく、周囲の物にまぎらはしき色もな
く、自衛の具、甚だ少なし。然れども、智力
秀でたれば、工夫して、武器を作り、且つ、よ
く和親協力して、他の動物に當る。是れ、
如何なる猛獸、毒蛇も、人間に敵する能は

※

ずして、次第に驅り立てられ、山奥、野の末
にのみ、辛うじて、その生を保つ所以なり。
智識と協和とは、人類の最大利器なり。

第八課 大塔宮吉野落

命の綱と頼みたる

吉野の城も、今は、早や、

あらしの前の花なれや、

とても散るべきものならば、

※ ※ ※

* 覺悟 *

*

*

いで、潔く散らばらば、と

宮は、覺悟をきめたまふ。

主従あはせて、幾十騎、

雲霞の如き敵中へ、

命なげすて、切り入れば、

敵はこらへず、追ひたてられ、

谷間くへ、逃げ下る、

風に、木の葉の散る如く、

さもあれ、敵には新手あり、

入りかはり、また攻め寄する、

長く防がんとすべもなし、

藏王堂の大庭に、

宮一同を集めさせ、

最期の酒宴を張らせらる。

かゝる折しも、かけつくる

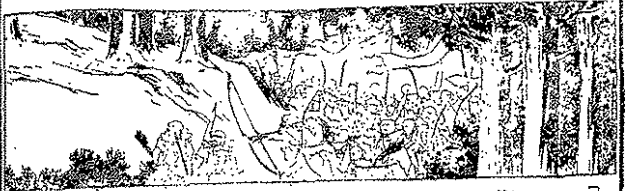
村上彦四郎義光、

手傷きびしく負ひながら、

宮の御前にひざまづき、

最期

*



「はや、事急なり。恐れながら、御直垂ひらぎや、御鎧よろい、ぬがせられて、賜はれまはやくとす。むれど、いかで、さること。忠臣をひとり残して、落ちんや」と、聞き入れたまふけしきなし。義光、大きに氣をいらち、國の安危を、一身に



荷ふ御身ぞ。むざくと、こゝにて、御最期あるべしや。是非、落ちたまへ。といひつゝも、御物の具の紐を解く。宮みや、げにも、とやおほしけん、直垂ひらぎ、鎧よろい、ぬがせられ、我れ、若し、生きて、世にあらば、汝があとを弔はん。死なば、あの世で逢ふべし」と、

新編 徳川実録 卷三 一宮山月齋

涙ながらに落ちたまふ。

御影遠くなりし時、

宮のめし物身に着し、

櫓に現れ、大音聲、

「大塔宮は、我れなるぞ。」

最期のさまを見おけや」と、

腹がききつてぞ、うせにける。

「すはや宮には、御自害ぞ。」

我れ、首とらん」と、敵兵ばら、

* * *

*

圍み亂して、つとひくる。

さわぎにまぎれ、つゝがなく、

宮は、吉野の山こえに、

天の川へぞ、落ちたまふ。

第九課 蜜蜂

蜜蜂ハ、モト、群ヲナシテ、山野ニ栖ムモ

ノナルヲ、蜜ト蠟トヲ取ル爲メ、人家ニテ

モ、飼養ス。

飼 括

雌蜂

蜜蜂、一蜂ノ數ハ、多キトキハ、千ヲ以テ數フ。ソノウチニ、三種ノ蜂アリ、雌蜂、雄蜂、工蜂、是レナリ。

雌蜂ハ、只一頭アルノミ、女王ト名ヅク、群中ノ頭ナリ。雄蜂ト共ニ、巢ニコモリ居テ、子ヲ生ム。雄蜂ノ數ハ、間、數百頭ニ及ビ、四五月頃ノ五六十日間生存ス。巢ヲ造リ、食物ヲ集ムルナドハ、スベテ、工蜂ノ務ナリ。其ノ數、最モ夥シ。

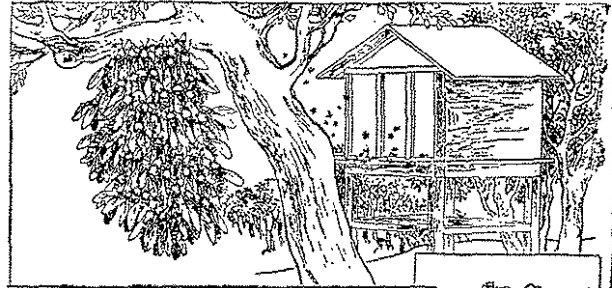
*

分泌

工蜂ハ、雌蜂、雄蜂ヨリハ小サケレド、其ノ羽根強ク、カヒシク飛ビマハリテ、花ヲ求メ、蜜ヲ吸ヒ取リテ、巢ニ運ブ。一足ノ工蜂ガ、運ブ蜜ノ量ハ、僅カナレド、數千足ガ、力ヲ合セテ、日々急ラズ運ブ故ニ、其ノ結果ハ、頗ル大ナリ。彼等ガ、一年間ノ食料ハ、實ニ、カクシテ貯ヘラル、ナリ。工蜂ハ、ソノ體內ヨリ、蠟ヲ分泌シ、之レニ、種々ノ物質ヲマシヘテ、巢ヲ作ル。巢

筒 隔障 枝 片 綴

ノ内部ニハ、蜂房、數多アリ、六角形ノ、小サキ筒ヲ組ミ合セタルガ如シ。房ハ、間毎ニ隔障アリテ、相支へ、各房ノ底ハ、三葉ノ菱形片ヲ綴ヂ合セタルガ如シ、其ノ構造ノ巧妙ナ



澆 膏

ルコト、人工ニモ優ルホドナリ。此ノ巢ノ中ニ貯ヘタル蜜ヲ取り、澆シテ、精製セルヲ、蜂蜜ト云フ。其ノ色黄ニシテ、粘リケアリ、味甘シ。食料ニモ、醫藥ニモ用ヒラル。又、巢ヨリハ、蠟ヲ取ルコトヲ得、コレヲ、蜜蠟ト云フ。或ハ、膏藥ノ料トナシ、或ハ、蠟燭ヲ作ルニ用フ。

第十課 一家の經濟

* 奢侈 經濟 *

千丈の堤も、蟻の穴より崩る。といふ諺あり。萬金を貯へたる財産家も、奢侈に耽りて、經濟を誤るときは、遂に貧窮に陥るべし。況や、尋常の家々をや。衣食の如き、日々の入用に關するものは、取りわけて、慎まざるべからず。些少の出費なりとて、氣をゆるさば、知らぬ間に、積もりく、驚くべき多額となるべし。慾は募り易く、限りなし。一たび慾

奢侈

整理 任

に負けて、奢侈の習慣を醸さば、募りく、て、身分不相應の奢りをなし、果ては、家産を傾くるに至るべし。經濟の要は、身分相當の家計を立つるにあり。而して、家計を整理する主任者は、男よりも、女なり。蓋し、一家の主人、即ち、夫たる人は、それぐ、職掌ありて、大抵、外出がちのものなれば、家計の整理は、主として、妻たる者の任となすべきなり。

一、家計簿の書き方
二、家計簿の書き方
三、家計簿の書き方

簿

超過金

一家の支出は、豫め、其の收入に應じて、相當の額を定め、帳簿を備へおきて、衣食、薪炭等、日々の雜費を記入すべし。月末には、當月内の出入を計算し、年末には、一年間の決算をなし、支出の總高が、最初の豫算に超過せしか、否か、を調査すべし。又、病氣、火災などの如き、思ひがけぬ出來事ありて、不時の支出を要することあり。常に、餘財を貯蓄して、かゝる用に備

ふべきなり。

第十一課 孟子の母

孟 葬 歎息 朱

住む家、墓場に近ければ、見なれ、聞きなれ、朝夕に、孟子は、友達集めつゝ、葬禮ごととして、遊びけり。母、これを見て、歎息し、朱に交はれば、赤し、とか、をさなき者は、はた次第、かゝる處に住むときは、わが子の爲めによから

五三
一、家計簿の書き方
二、家計簿の書き方
三、家計簿の書き方
三十三
一、家計簿の書き方
二、家計簿の書き方
三、家計簿の書き方

ずと、急ぎ、住居を移しけり。

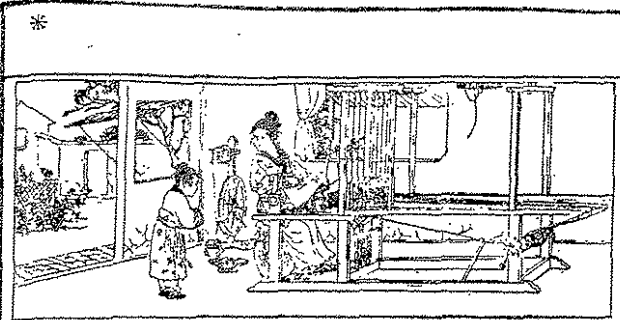
住む家、市に近ければ、見なれ、聞きなれ、此のたびは、客呼ぶまねや、ねぎるまね、商ひごととして、遊びけり。こども、我が子に不為めぞと、またひき移る新借屋。

學校まぢかなりければ、教へざれども、いつとなく、ならふ読み書き、人の道、行儀よくして、遊びけり。母は、

やうく安心し、そこを住居と定めつゝ、送る春秋、幾めぐり。

かくて、孟子はおひたちて、他郷に遊學なしけるが、ある年、母の戀しさに、學問休みて、歸りくる。

折しも、機を織りあたる、母は見返り、何故に、歸り來りし、學問は、其ののち、いかほど進みしと、詰られて、孟子、おどくと、まだ、いか程も、進まねど



母様戀しく、それ故といへば、母親、けしきをかへ、かたへの及物とりあげて、織りかけし機を断ちきりぬ。
 こは何事と驚けば、母は、かたちを改めて、これ此の機をよう見よ。今断つときは、きのふまで、織りしはすべて、あだとなる。學びの

*

* 撓 *

道も、その如し、中途に、心撓みなば、多年ならひし學問は、皆いたづらとなるべきぞ。おろか者めと叱りける。孟子恥ぢいり、その後ちは、心入れかへ、一心に、學問修め、賢人のほまれを、世々に残しけり。

第十二課 瀑布

陰

谷川の早瀬にそひて、松、杉、楓などの陰

龍壺	絶壁	瀑	*	*	路
ふかき山路を登りゆけば、山愈々高くして、路益々峻しく、行手の方に、遠雷の如き響聞こえ、登りゆくに隨うて、其の音次第に近づく。かくて、あへぎ登ること半町ばかりにして、遂に、一大瀑布の下に出づ。	すさまじき響は、山岳を震ひ、數丈の絶壁より落ち來る水の勢ひ、たとへんに物なく、岩も碎かれ、地も穿たるゝか、と疑ふ。	龍壺の深さは、知るべからず。落ちくる			

激	坂	崖	深々
水は相撃ちて、水煙、八方に飛散し、中ほどより以下は、霧の如く濛々たり。日光これに映ずれば、虹の如き色を現す。うつくしく心地よく、いさまし。	かくの如きは、瀑布の一例なり。瀑布に、いろくあり。断崖を直下せずして、急坂をすべり落つるものもあり。さる場合には、水激せずして、さらさらと走り下る。譬へば、多く、白糸を投げかけたるが		

録

如く練絹を布きたるが如く、水晶の簾を吊りおろしたるが如し。

紀伊の那智、下野日光の華嚴等は、我が國の大瀑布なり。

世界第一なるは北米合衆國のナイヤガラニヤガラの瀑布なり。この瀑布中央に島あるゆゑ、水二つに分かれて流れ落つ。高さ各二十八間、幅合せて三百三十間あり、といふ。その壯絶なる様、想ふべし。

想*

第十三課 富士登山 五

富士山に登るには、毎年七月の始めより八月の中頃までを可とす。この間には、山頂の雪も消ゆればなり。登山の路四あり。駿河の方に三甲斐サウバイの方に一々の中、駿河の須走スソウより登るを通例とす。

東京新橋の停車場より、汽車にて西行すること五時間にして、駿河國御殿場の

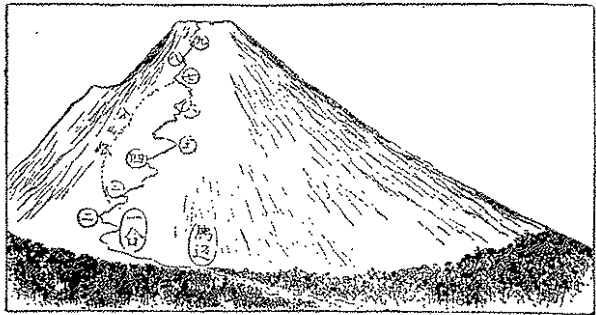
此驛

驛に着く。御殿場より二里許茫々たる裾野の草を分け行けば、須走驛に達す。この邊は海面よりも高きこと二千六百尺なれば、盛夏の氣候すらも春の如し。それよりは強力を雇ひて進むを例とす。強力とは旅客の荷物、食糧等を脊負ひて道案内をなす者なり。行くこと二里にして、茶店あり。是れより、嶮阻にして馬通はず、故にこゝを馬返といふ。

此強

此阻

草 眺 剛杖



一里ばかり登れば、金剛杖を賣る處あり、購ひて進む。草も樹も漸く短小となる。遙かに眺むれば、草色煙の如く、大空の雲に接す。近づきて見れば、蓬の如き短き草、處々に散點す。おがて、大石を積みて

四壁と屋根とを造れる一の室を見る。
 * こゝを一合目といふ。これより頂上まで、凡そ十町毎に石室あり二合目三合目などと稱す。

登りくゝて五合目六合目を經て七八合目に至れば路甚だ峻し。空氣次第に稀薄となりて呼吸切迫し、流汗雨の如く下る。八合目に達する頃遙かに山麓を顧れば暮色漸く、群山を埋め日將に沈ま

* んとして富士の影半腹の雲に浮ぶ。
 八合目の石室に入りて一宿す。室内は板と蓆とを布きて床となせり。
 炭 寒さ烈しければ焚火して暖を取る。かゝる高地にては空氣稀薄なれば薪よくは燃えず飯もよくは煮えず。



第十四課 富士登山 (下)

晴朝

寒さに眠られねば翌朝早く起きて、室
 外に出づ。四面は暗黒なれど、中天は晴
 朗にして、星常よりも明かに見ゆ。既に
 して、東方微かに白み、紫色の筋の棚引く
 と見るうちに、淡紅となり、深紅となる。
 見るく、金光雲を破りて、迸り出て、天の
 一方を射る。既にして、深紅の雲は、變じ

暁

*

暁

*

洞

て、黄玉色となり、其の中より、熔解したる
 銅の塊か、と思はるゝもの、躍り出づ、これ
 太陽なり。此の時、天地、全く明かとなる。
 日の出を見了りて、後ち、更に、頂上に向
 ひて、上る。道の峻しき、甚しく、岩角は、尖
 がりて、劍の如し、幾たびも、鞋を代ふ。呼
 吸、益々切迫し、寒さ、身に透る。九合目を經
 て、始めて、絶頂に達す。
 絶頂には、一大洞あり、噴火口の跡なり、

※ 深さ五十餘尺、その周邊に、萬古の雪を湛ふ。周邊、凡そ二十餘町、八峯、劍の如く立ちて、これを圍む。洞穴の側に、金明水、銀明水といふ二つの泉あり。又、富士神社あり。社頭に立ちて、下の方を望めば、南は、東海道一帶の陸海、山嶽は、土塊の如く、湖沼は、盆池の如く、長河は、銀の絲に似たり。蒼海は、茫々として、天に連り、水陸は、只一筋の白沙を以て、境をなすのみ。後

毫



山の上の眺望

雪の土

方は、東山、北陸の大山嶺、群り立ち、加賀の白山、越中の立山、信濃の御嶽、淺間山など、呼べば、殆ど應へんとす。

これより、嶽を下る。下るときは、すべる様にて、毫も、路の峻を覺えず。七合目より、麓までは、悉

踏 録 堅
く、砂路なり。金剛杖を立て、強く沙を踏めば、自然に、人を載せて走る。殆ど、止まる處を知らず。風は、飄々と、衣髪を纏し、身は、さながら、天空より墜つるものゝ如く、二時間にして、山麓に達す。
かくて、馬返に着き、須走を經、やがて、御殿場に至りて、顧れば、端然たる山容、大空に聳え、白雲しづかに、山腹にかゝりて、さながら、我れを送るものゝ如し。

堅牢 貫突
第十五課 短篇一束
矛と楯
むかし、矛こと楯たてとを造りて、賣る者ありき。その矛の鋭きを誇りて曰はく、この矛をもて、突つかば、鐵石も貫くべしと。また、其の楯の堅牢なるを誇りて曰はく、いかなる箭も矛も、此の楯を以てすれば、防まぐを得べしと。或人詰りて曰はく、さら

賣 六 馬 半 斗 上 定 月 長 三 三十三 寄 山 号 家 反

ば、汝の矛をもて、汝の楯を突かば、いかにと。
と。 賣る者、口ふさがりぬ。

鹿わな

わなをふせて、鹿を捕りし者ありけり。
わなに於て、捕りたるは、名譽にならねば、射
たりといつはりて、ほめられんと思ひ、雁
股の矢を番へて、其の鹿を射けるに、鹿に
は當らで、わなの綱を射切りければ、鹿は、
忽ちのがれ去りぬ。 この男、足ずりすれ

どもかひなし。
世は相もち
目くらとおしと、ゐざりと、一つ家に住
みて、興來れば、ゐざり歌ひ、目くら彈じ、お
し起。て舞ひけり。 イツれも、樂しげなり。
或夜、隣家に、火事起こりぬ。 三人、あわて
ふためきて、遁れんとすれど、能はず。 人
あり、教へて曰はく、目くらは、ゐざりを負
へ。おしは、これを導きて、逃げよ。と。 三人

賣 六 馬 半 斗 上 定 月 長 三 三十三 寄 山 号 家 反

免

これに従ひ、遂に難を免るゝを得たりき。

第十六課 分業

商店ニテ、價五錢ニ賣ルホドノ團扇ハ、美シキ繪ナドカイタル、相當ニ念入りノ品ナルベシ。今、其レト同ジホドナルヲバ、自力ニテ造ラントセバ、如何。晝夜ヲ兼ネテ造ルトモ、製造高一日五本以上ニ出デジ。サテ、ソレヲ小賣五錢ノ割ニテ、

*

卸

*

削 刷

問屋ニ卸サンニ、原料ノ費用ト、手間賃トヲ引キテ、相當ノ利潤アルベシヤ、否ヤ。恐ラクハ、損ト得ト、相償ハザルベシ。團扇ノ製造所ニ行キテ見レバ、數多ノ職人アリテ、手分ケシテ、事ニ従フ。竹ヲ削リテ、骨ヲ造ルモノアリ、紙ヲ張ルモノアリ、繪ヲ刷リ出スモノアリ。只一本ノ團扇スラモ、數人ノ分擔ニヨリテ、成ルナリ。コレヲ、分業法トイフ。而シテ、ソノ

廉價 捌

出来モ、其ノ仕上ゲノ速サモ、到底一人ニテ造ル時ト、比スベクモアラス。是レ、随分、手ノカ、リタル品ノ、割合ニ、廉價ニ賣捌カル、所以ナリ。

蓋シ、分業法ニヨリテ、事ヲナサバ、第一ニ、時間勞力ヲ省クヲ得ベク、次ニハ、職人ヲシテ、一事ニ專ラナラシムルガ爲メニ、自ラ、其ノ技ニ、熟達セシムルヲ得ベシ。

要スルニ、分業ト協同トハ、文明生活ノ

必須 偏廢

必須法ニシテ、譬ヘバ、車ノ兩輪ノ如ク、偏廢スベカラザルモノナリ。

第十七課 望遠鏡の發明

今より、三百年ほど前かた、和蘭國オランダに、或貧しき眼鏡師ありき。その幼きむすめ、或日、仕事場に遊び居しが、如何にしけん、俄かに、聲をあげて、父上く、あれ、あの塔の、近く見ゆることよ。と、叫びたり。怪み

て、近より見しに、少女は、眼鏡に用ふる玉を、一つ宛、左の手に持ち、左手なるを遠くし、右手なるを近よせて、それを透して、かなたの寺の塔を望み居たり。その玉を検べけるに、右のは、半面平に



して、半面は凹みたり、又、左のは、半面平にして、半面は凸かなりき。眼鏡師は、不思議に思ひて、自ら、伴の玉を取りて、少女の爲し、如く、幾たびも試みけるが、遂に、凸凹の玉を程よく隔て、透し見れば、遠きものをも、近く見得べき由を悟りぬ。かくて、工夫を凝らし、末に、厚紙にて、筒を造り、數箇の玉を籍め込みたるものを作りけるが、これ、やがて、今の望遠鏡の

起源なりき。天文學の進歩は、主として、望遠鏡の賜なりと思へば、此の發明の功、大なりといふべし。

第十八課 星ノ話

恒星 輝 仰

ヨク晴レタル夜ニ、仰イテ、空ヲ望メバ、大小無數ノ星ノ輝ケル様、サナガラ、寶玉ヲ散ラセルガ如シ。天文學者ノ研究ニヨレバ、コレヲノ星ニハ、恒星、遊星、流星、慧

*

星等ノ數種アリ。

距離

恒星ハ、大ナル星ニテ、自ラ、光ヲ放チテ、輝ク。太陽モ恒星ノ一ツナリ。他ノ恒星ノ、太陽ニ比シテ、甚ダ小サク見ユルハ、ソノ距離ノ、甚ダ遠キガ爲メナリ。遊星ニハ、光ナケレド、恒星ノ光ヲ反射シテ輝キ、常ニ、其ノ周圍ヲ旋轉ス。地球ヲハジメ、水星、金星、火星、木星、土星ナドハ、皆、太陽ノ周圍ヲ旋ル遊星ナリ。他ノ遊

* 星ニ附屬シテ、ソノ周圍ヲ旋ルモノヲ、衛
星トイフ。月ハ地球ノ衛星ナリ。

閃々

恒星ハ、自ラ光ヲ放ツガ故ニ、其ノ光、閃
々トシテ輝ケドモ、遊星ハ、自ラ光ヲ放タ
ザレバ、ソノ光、靜カナリ。恒星ト遊星ト
ハ、カクシテ、見分クルヲ得ベシ。

* *

又、往々ニシテ、天ノ一方ヨリ、忽然、光ヲ
引キテ、現ルト見ル間ニ、他方ニ流レ去リ
テ、影ヲ失フ星アリ。ソハ、小サキ星ガ地

* 球ノ引カニ、引キ寄せラレテ、落ツルトキ、
空氣トスレアヒテ、燃エ、光ヲ放ツナリ。
カ、ル星、折々ハ、地上ニ落チ來ル。拾ヒ
テ、檢スルニ、ソノ質ハ、概シテ、鐵、又ハ、
ケルナドナリトゾ。

帯

* 彗星ハ、ソノ形、帯ノ如ク、長ク尾ヲ引キ
テ、天上ニアラハル。

*

銀河ハ、俗ニ、天ノ川トイフ。大空ニ、帶
ノ形ヲナシテ、横ハレリ。コレハ、無數ノ

小サキ星ノ群集セルナリ。

以上、各種ノ星、ソノ大小、遠近、一様ナラズ。大ナルモノハ、太陽ヨリ遙ニ大ナルモアレド、ソノ距離遠クレバ、微小ニ見え、中ニハ、肉眼ニテハ、見ルベカラザルモアリ。望遠鏡ヲ以テシテモ、尚ホ、認メ難キモノサヘアリ。大空ノ、イカニ大ニシテ、星ノ數ノ、イカニ無量ナルカヲ想フベシ。

* *

第十九課 少年駱駝御者

むかし、亞刺比亞の或町に、ハッサンといふ妻子のある駱駝御者がありました。

隊商連と一しゝに、大沙漠を通じて、スエズへ往復するを、生業として居ましたが、或時、スエズから妻の許へ、我が子のアりに、駱駝をつれさせて、荷物を取りによこせといひ送りました。

妻は、ア리가、幼い身で、慣れぬ旅に赴く

* *

を、心懸りには思つたなれど、人中へ出すも一つの修業と思ひ、旅立ちの準備をさせました。

アリは、旅に出るのが、珍しさに嬉しくてなりませぬ。年頃飼ひならしたおとなしい駱駝に乗り、飲用水を壘につめ隊商の仲間に加はつて、勇ましく出立しました。

隊商等は、途々もいろく面白さうに

壘

*

*

話をしながら行けど、アリは、話相手もなければ、駱駝のみを、友にして、一日も早く父に遇ひたいと、願ふのみであった。

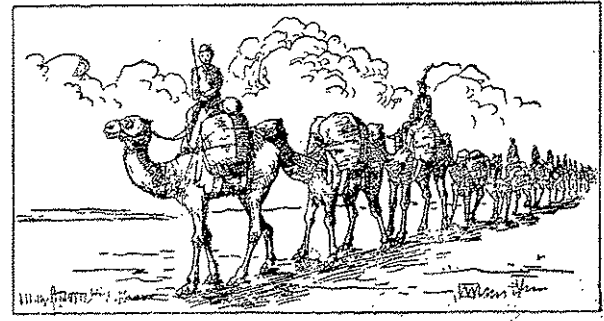
熱帯地方のこととて、太陽は、はげしく照りつける。暑さは、焼く様で、沙漠は、一面に、きら／＼と光る。どこも／＼、沙漠ばかり。晝頃になつて、やう／＼、僅かばかりの木蔭と泉とがある處に着いた。そこで、暫時休んで、湧き出づる清水に、渴をい

木蔭

* 湧

*
やし、壘の水をつめかへ
などして、又、出かける。
そのうちに、日が暮れる
と、一同は、天幕を張って、そ
のなかで、一夜を明しま
した。

翌日も、其の翌日も、同
じ様に、して、四日目になっ
た。すると、その正午頃



*掩
に、熱い風が、俄かに吹き起って、砂煙は、空を
掩ひ、天地がま、くらになつたゆゑ、一行は、已
むを得ず、進行を止めた。

痕
暫くして、風もやみ、砂もしうまつたが、困
たことが出来た。今までは、駱駝の通つた
足跡をたよりに、進んで来たのに、風で、蹄
の痕が消えたゆゑ、方角がわからなくな
り、右へ往つては、左へもどり、左へ往つては、右
へもどり、一つ處にのみ、さまよつて居た。

その中に、壘の水は無くなつたが、水を得る
よすがはない。一行は、互に、顔を見合せ
て、途方に暮れました。

そのうちに、日が沈んだ。アリは、晝の
疲れで、睡るともなく、うとくと睡りま
したが、ふと目を覺ますと、人々の話聲が
聞こえる。一人が、いふ、もし、あすのう
ちに、水のある處に、着かなければ、止むこ
とを得ぬ、駱駝を一足殺して、その胃の中

陸 沈

水を飲むことにしよう。又、一人、それ
は、誰れの彼れのかといふより、アリと、い
ふ子供のを殺すことにしよう。といふ。

アリは、胸を貫かれた様に驚きました。
不便や、あすまで、かうしてあれば、駱駝は
殺されてしまふ。もう、寸時も猶豫はな
らぬ、と思つた。そこで、人々の熟睡するを
待つて、そと、駱駝を曳き出し、急いで、それ
に乗つて、蹄を早めて、逃げ出した。

* *

與

* *

晴れ渡。た空には、無数の星がかゞやいて居た。アリは、幸にも、どの星が、始終、北に現れ、どの星が、いつも、日没後に、西に現れる、といふことを心得てゐた。それゆゑ、それらの星を目じるしにして行けば、東西南北がわかるわけ、と知つて居たので、只一念に、それをたよりに、駱駝に、鞭を加へました。

かうして、方角をさぐりく行く中に、

＊ ＊ ＊

夜は、ほのぐと明けた。見ると、沙の上に、近頃通。たらしい駱駝の足跡がある。これに、力を得て、南へくと行くと、その日の夕方、遙か向うに、ほんやりと、火影が見える。急いで、往つて見ると、一群の隊商が野宿して居た。アリは嬉しく、早速駱駝からおりて、一同に向ひ、ありし事どもを語り、どうぞ、同伴させてくだされ、と頼みました。

火影

＊

同伴

一同は、アリのけなげな話に感心し、心よく、同伴を承諾するうち、ぢやらくと響く鈴の音と共に、南方から、また、一隊の隊商が到着したが、そのうちに、思ひがけなくも、アリの父がまじって居た。

聞けば、父は、スエズに居て、アリの來るのを待ちわびて、ちよど、郷里へ歸らうとする連中あるを幸に、迎ひかたぐ、出かけたのであった。思はず逢うた親子の悦

※ 郷里

巻

びは、どんなでありましたらう。

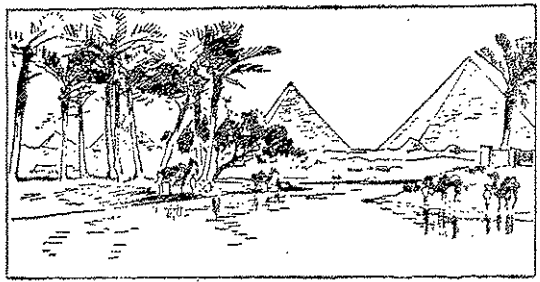
かくて、アリは、父と共に、樂しき旅行を終へ、やがて、恙なく、我が家に歸り着き、始終の話を、くはしく、母親に話しました。

第二十課 埃及のピラミッド

亞弗利加の東北端に、埃及といふ國あり。此の國は、五千年以前、既に、開明國を以て、聞こえたりき。名高きピラミッドは、

王廟 其の頃に造られしものにて、歴代の王廟なりといふ。

煉瓦 底徑 ピラミッドは、悉く、花崗石、又は、煉瓦より成り、横より見れば、大なる金字形を成す。故に、或は、金字塔とも稱す。其の數、七十餘基にて、最も大なるものは、ナイル河の西岸にある三基中の一なり。高さ四百八十七尺、巍然として、空に聳ゆ。底徑は、七百六十八尺、面積一萬五千餘坪を蔽ふ。



其の積み重ねたる石は、一個にして、重量、數千萬貫に及ぶものも少からずといふ。

おもふに、之れを築造するには、一萬人餘の人の力と、三十餘年の日子とを費したりしならん。其の規模の雄大なる、支那の長城と

偉觀

共に、土工の偉觀なり。

*

此のピラミッドの内部には、深く、地下に
設けたる數多の室あり。是れ、王家一門
の石柩を安置せる處なり。石柩の中に
は、ミイラとて、ミイラ包被にて包みたる
死屍を藏す。ミイラ包被にて包みたる
死屍は、三千年以前のもつと雖も、腐敗す
るに至らず、發掘して、包被を取り去れば、
今なほ、其の面貌、生けるが如し。

石柩

死屍

*

埃及には、ピラミッドの他、方尖塔、女面獅
身像などいふ、珍しき建設物の殘在せる
もの、頗る多し。

第二十一課 物價の事

假

*

假に、米一俵は、五圓にて買ふべく、麥一
俵は、四圓にて買ふべし、とせば、米と麥と
の間に、位の差あるを見るべし。此の例
にては、米の位、五にして、麥の位、四なり。

位は即ち價なり。絹布の位は、木綿よりも高し、故に、其の價も貴し。金銀の位は、鐵よりも高し、隨うて、其の價も貴し。

物の價の異なるは、主として、需要、供給の關係より來る。供給とは、品物の製造高を云ひ、需要とは、之れを買ひて、消費する力をいふ。買ふ力、餘りありて、製造高不足なるときは、品物の價高く、品物多くして、買ふ人少きときは、品物の價低し。

* 需要

*

*

需要あるもの、必しも價あるにあらず、暑に苦むとき、誰れか、涼風を欲せざらん、然るに、涼風には價なし。錢を出だして買はずとも、天然の供給餘りあればなり。天然の供給餘りあれば、需要は大なるも、價なきを定めとす。是れ、物に賣買の價と、天然の價との別あるに由る。米麥などは、供給に限りあれば、賣買の價ありて、金錢と交換すべく、清水、涼風は、天然の

*

*

價あれども、供給餘りある故に、賣買の價なく、隨うて、金錢と交換すべからず。

但し、通例は、供給餘りあるものも、處がらに由りては、價を生ずることあり。井を穿ち難き土地などにては、飲用水得易からず、飲用水は、すべて、他處より荷ひ來る、隨うて、水一荷につき、何拾錢といふ價を生ずるなり。鈴蟲、松蟲などが、田舎にては、價なけれど、捕へて、都に持ち來れば、

*

一荷

若干の價を生ずるが如し。

第二十二課 貨幣及び爲替

補

世の中、未だ開けざりし頃には、甲の人と乙の人が、不足を相補ふ場合あるも、物と物とを交易するのみ、今日の如く、貨幣を用ふることなかりき。されど、かくては、不便なるが故に、人智の進むにつれて、遂に、一種の品をえらび、之れをもて、あ

*
 らゆる品物の代りとなし、廣く通用することとなりぬ。これ、貨幣の起原なり。物の價格は、それぐに異なるゆゑ、貨物にも、段等あるを要し、金貨、銀貨、銅貨等の別を生ぜり。同種の貨幣中にも、また、段等あり。
 貨幣の代用として造られたる物を、紙幣となす。紙幣は、金銀と交換せらるべき筈のものなり。

懷中
 *券
 貨幣、紙幣は、便利なるものなれども、遠方の商人と取引するに、一々、郵便などにて、現金を送り、又は、懷中して、旅行するは、荷物にもなり、紛失又は盜難の恐れあり。此の不便を除く爲めに、爲替といふ者あり。
 爲替とは、遠方へ、金錢を送る折などに、便宜の銀行又は郵便局へ、現金を拂ひ込みて、爲替券といふ證書と引き替へ、それ

を封入して、先方へ送り、かなたの爲替取扱所にて、其の券を現金と引き替へしむることをいふ。

旅行中などに、至急の需要起こる時、普通の爲替にては、間に合ひ難し。さる場合には、電信爲替といふあり、こは電信にて、金高を言ひ遣るなれば、最も速かなり。

國語讀本 高等科 生徒用 卷三 終

明治三十三年 九月廿九日 印

明治三十三年 十月二日 發

明治三十三年 十二月廿三日 訂正再版印刷

明治三十三年 十二月廿六日 訂正再版發行

刷 (國語讀本 高等與附)

卷ノ一 定價	金拾八圓 卷ノ五 定價	金廿二圓
卷ノ二 定價	金拾八圓 卷ノ六 定價	金廿三圓
卷ノ三 定價	金貳拾圓 卷ノ七 定價	金廿三圓
卷ノ四 定價	金廿二圓 卷ノ八 定價	金廿四圓

著 作 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 東京市神田區裏神保町九番地 合資 富 山 房

代 表 者 合資會社富山房社長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 東京日本橋區錦町三十三番地 仁 科 衛

印 刷 所 同 厚 信 合



發 兌 元

富山房 (電話浪花一四六番) 合資會社 (電話本局) 電話 ヤマフ (電話浪花一四六番) 加入 (電話本局) 電話 ヤマフ

